

エンドオブライフにおけるケアマネジメントの基盤としての価値

○ 東京都健康長寿医療センター研究所 福祉と生活ケア研究チーム 島田 千穂 (05611)

キーワード：エンドオブライフケア、ケアマネジメント、価値

1. 研究目的

ケアマネジメントは、利用者の社会生活上でのニーズを充足させるため、利用者と適切な社会資源とを結びつける手続きの総体と定義づけられている（白澤 2019：7）。何らかの理由で地域生活が困難な利用者の生活の質を高めることをめざし、支援を組み立てるプロセスである。そこでは、地域生活を困難にする要因を、利用者本人の疾病や障害といった身体機能に加え、利用者を取り巻く環境面からのアプローチが重要となる。

ケアマネジメントの過程は、支援が必要な状態にある利用者の、人生の最期まで必要とされる。しかしながら、これまでのケアマネジメントにおいて、エンドオブライフを支える関わりは重視されてこなかった。その理由として考えられるのは、死に向かうプロセスを支えるのは医療者中心との誤解があるためと、生活支援で想定するモデルとは異なる、別の視点からの目標設定が必要になるためである。

エンドオブライフケアでは、医療と生活支援が協働する必要があるが、通常のケアであれば自然に共有目標となる「改善」の想定は困難である。利用者の地域生活の継続を可能にするために、解決すべき課題を抽出し、それらの課題を解決するための目標を設定しようとする時、身体機能、生活の仕方、社会との関わり等、回復の物語を関係者間で共有できないエンドオブライフにおいて、どのように支援目標を共有すればよいのであろうか。

エンドオブライフケアにおいて、「その人らしい最期を支える」との抽象的な目標は共有できても、個別具体的にみると、利用者や家族、ケアマネジャーの人間観や死生観が関連して様々である。それゆえ、エンドオブライフを支えるケアマネジメントのあり方を問う価値研究は不可欠である。価値の善悪ではなく、どのような価値に立脚して利用者と向き合っているかを、ケアマネジャー自身が自覚できるための枠組みの構築が必要と考える。

本研究では、エンドオブライフにおけるケアマネジメントのあり方を探索するために、介護施設の介護職員、看護職員の語りから、看取りへの取り組み過程で認識した、自らがそれまで持っていた価値の枠組みからの転換や、看取りを阻害する通用している価値の経験を整理する。それによって、エンドオブライフケアにおけるケアマネジメントに求められる価値を論じることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

分析に用いるデータは、高齢者介護施設でより良い看取りに取り組むためのグループディスカッションの語りの逐語録である。参加者は特別養護老人ホームに勤務する介護職 71名、看護職 35名で、職場、職種、性別、年齢が多様な 16 グループを構成し、看取りケア事例紹介を通じて、より良い看取り実現に向けた課題を議論した。この逐語録から、介護職や

看護職が認識する看取りケアの価値を抽出するための内容分析を行った。

3. 倫理的配慮

研究への参加について、事前に内容を説明し同意を得た。発言には個人情報が含まれないよう依頼した。研究計画については、所属機関の倫理審査の承認を受け実施した。

4. 研究結果

高齢者介護施設の看取りケアを特徴づける価値として語られたのは、以下の4点であり、それぞれに対して、常識的価値が阻害要因となっていた。

① 本人が心地よく過ごせているかどうかを基準にする

改善が想定できなくなった時の共有成果として、本人の心地よさを第一にする考え方が語られた。治療やケアを導入する時の判断基準として、本人の表情や過去の生活習慣や嗜好があげられた。一方、それに対して、介護職、看護職、医師が、自らを安心させるための依存的な決定として入院を選択する可能性が語られた。

② 枯れるような最期が良い

①の結果として、最終的には生命力を使い果たし枯れるような最期になることが良いという実感が語られた。点滴や経管栄養の減量や中断の判断ができず、苦痛を与えることになった経験と、対にして語られた。家族や職員が、治療しない状態の本人の傍らに居て支援することを困難と感ずることが、阻害要因としてあげられた。

③ 看取りは生活の延長線上にあるもの

①と②が可能になる前提として、看取りケアが特別な時期に限定して提供されるものではなく、入居者の生活の延長線上に当然あるものとして位置付ける必要性が語られた。職種役割として、家族と共に入居者の最期の生活を支える介護職を中心にして、看護職は医療的な側面から、家族や介護職の不安を支える役割が期待されていた。

④ 画一的な理想にとらわれない

看取る家族がない、最後に間に合わないなど、一般に理想的とされる看取りとは言えない最期を迎える場合もある。入居者の人生の最期として、受け入れる態度が必要と語られた。

5. 考察

エンドオブライフにおけるケアマネジメントにおいては、本人の心地よさを基準にしながら生命力を使い果たすプロセスを目指すことが、共有できる価値と考えられる。そのためには生活に必要な治療を取捨選択して、本人の生活の継続を支援する必要性が示唆された。エンドオブライフケアにおける家族の満足感や、職員の安心感は、副次的成果である。まずは本人の生活の延長線上にあるエンドオブライフを想定しながら、本人の心地よさを共有価値としたケアマネジメントモデルの構築が求められる。

引用文献：白澤政和編著（2019）『ケアマネジメント論』ミネルヴァ書房。